死んでいた狒狒

田中貢太郎

青空文庫

昔から山には魑魅、水には魍魎がおると云われているが、明治二十年比の事であった。日向の山奥で森林を伐採した事があって、附近の者は元より他国からも木客が集まって来たが、その木客だちは、昼は鬱蒼たる森林の中ではたらき、夜は麓に近い山小屋へ帰って来た。

それは夏の夜の事であった。木客たちは夕飯の後で、例によって露骨な男女の話をしていると、谷を距てた前方の山から、

「おうウイ」

と云う声が聞えて来た。それは何人かが此方へ向って呼びかけている声であった。ところで木客だちは、そのおうウイの声を酷く忌み嫌っているので、何人もそれに応ずる者はなかった。と云うのは、その声は山の怪異の呼びかける声で、万一それに応じでもすると、一晩中応答しなくてはならぬが、そんなに長く声の続くものでない。それで声が続かなくなるような事でもあると、得態の知れない毒素に当って血を吐いて死ぬると云われていた。木客たちは顔を見合わして黙っていたが、前方の声は後から後からと聞えて来た。ところで、前方の声は魅力のある人を惹きつける声で、うっかりしていると引きこまれて返事をしたくなるのであった。

広島県の者だと云う壮い木客の一人が、その時ふらふらと起って外へ出て往った。一座の者は便所にでも往ったろうと思っていると、小舎の外の崖の方から、

「おうウイ」

と云う壮い木客の声が聞えて来た。すると前方の声はそれに纏りつくように、

「おうウイ」

と応じて来た。と、又壮い木客の声がそれに応じた。

「おうウイ」

「おうウイ」

「おうウイ」

「おうウイ」

壮い木客の声と前方の声は交互に聞えだしたが、その声はしだいしだいに熱を帯びて来た。小舎の中の者はじっとしていられなくなった。

「こりや、いかん」

「此のままにしておかれない」

「負けたら、大変だ」

「山の者を皆呼んで来い」

小舎の中の者は蜘蛛の子を散らすように外へ出た。そして、壮い木客の傍へ往く者もあれば、近くの小舎から小舎へ同僚を呼びに往く者もあった。その時壮い木客は、月の光を浴びて狂人のようになって呼び続けていた。

「おい、おい、休め、休め、俺が代ってやる」

木客の一人は、壮い木客を突き飛ばすようにしておいて、自分で代って、

「おうウイ」

をはじめた。そして、その男が疲れて来ると他の者が代ってやった。木客の数は多いので幾何でも応ずる事ができた。と、そのうちに前方の声が弱って来て、小さな声になり、やがてそれがぴたりやんだ。一同は勝鬨をあげて壮い木客を伴れて小舎の中へ入ったが、

その時はもう黎明に近かった。

朝になって彼の壮い木客は、谷の前方の声のしていた方へ往ってみた。そこに杉の大木があって、その根元に大きな狒狒が口から血を吐いて死んでいた。

青空文庫情報

底本：「伝奇ノ匣6　田中貢太郎日本怪談事典」学研Ｍ文庫、学習研究社
　　2003（平成15）年10月22日初版発行
底本の親本：「新怪談集　実話篇」改造社
　　1938（昭和13）年
入力：Hiroshi_O
校正：noriko saito
2010年10月20日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

死んでいた狒狒

田中貢太郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/